

おかめのはなし

THE STORY OF O-KAME

小泉八雲

青空文庫

土佐の国名越の長者權右衛門の娘おかめは、その夫八右衛門を非常に好いていた。女は二十二、八右衛門は二十五であつた。余り夫を愛するので、世間の人は嫉妬の深い女だろうと思つた。しかし男は嫉妬されるような原因を作つた事もなかつた。それで二人の間にはいやな言葉一つ交された事もなかつた。

不幸にしておかめは病身であつた。結婚後二年にもならないうちに当時土佐に流行していた病気にかかるは、どんな良医も匙を投げるようになつた。この病気にかかる人は、喰べる事も飲む事もできない、ただ疲れてうとうとして、変な夢に悩まされているだけであつた。おかめは不斷の看護を受けながら、毎日次第に弱

つて行つて、とうとう自分でも助からぬ事が分つて來た。

そこで彼女は夫を呼んで云つた、

『私のこのいやな病氣中あなたがどんなに親切にして下さつたか
口では云えません。こんなによくして下さる方はどこにだつてあ
りません。私、あなたに別れるのが本当につらい。……考えて下
さい、我まだ二十五にもなりません、——その上私の夫ほどよい
人はこの世にはありません、——それでも私は死んで行かねばな
らない。……いいえ、駄目、駄目、氣休めをおつしやつても駄目
ですよ、どんなお医者だつてどうにもならないのですもの。もう
二三ヶ月生きていたいと思いましたが、今朝鏡を見たら、今日の
うちに死んで行かねばならぬ事が分りました、——そう、丁度今

日です。それであなたにお願がありますの——私が安心して死んで行けるように思つて下さるようなら、——その願を私にかなえさせて下さい』

『一寸ちよつと云つて御覽、何だか』八右衛門は答えた、『私の力でできる事なら、どんな事でも喜んでして上げる』

『それが——あなたのちつとも喜ばない事なんです』彼女は答えた、『まだ若いのですもの、こんな事をお願することは、中々——大変——むつかしい事ですわ、でもその願事は私の胸に燃える火のようです。死ぬ前に云わせて下さい。どうぞ。……ね——あなた、私が死んだら早晚、皆であなたに奥様を持たせるでしょう、ね、あの、約束して下さいませんこと、もう二度と結婚はし

ないと、——おいやですか……』

『何だ、そんな事か』八右衛門は叫んだ。『願事と云うのはそれだけの事なのか、それは何でもない。よし、約束した、お前の代りは決して貰わない』

『ああ、嬉しい』おかめは床から半分起きて叫んだ。

それからうしろへ倒れた、同時に彼女の息は絶えた。

おかめが死んでから、八右衛門の健康は衰えて来るようであつた。初めはその様子の変りようを、人々は人情の悲しみの故と解釈していた、それで村人達は『どんなにあの奥様が気に入つていたのだろうな』とばかり噂していた。しかし月が重なるにつれて、

段々蒼白くなり弱くなりして、遂には人間ではなく幽霊ではないかと思われる程瘦せやつれて來た。それで人々はそんなに若い人がこう急に衰えるのは悲しみだけでは説明ができないと疑い出した。医者達の説では、八右衛門の病気は普通のものではない、様子は何とも解し難いが、何か心の異常のなやみから起つているらしいと云う事であつた。両親は色々尋ねてみたが駄目であつた。

——彼の云う処では、両親の知つている以外には、何等悲歎の原因はないとの事であつた。両親は再婚をすすめた。しかし死人に対する約束はどうしても破る事はできないと云い張つた。

それからあと、八右衛門はやはり日増しに衰えた、家族の人々

はその生命を危んだ。ところがある日の事、かねて何か心に隠している事を信じていた母が、熱心にその衰弱の理由を云つてくれるようにならしく泣いて頼んだ、母の懇願には勝たれなくなつた。

『こんな事はあなたにもまたどなたにも全く云いにくい事です、すつかり申上げて見た処で本当にはできますまい。実はおかめはあの世で成仏ができないのです、それからいくら仏事を行うてやりましても駄目のようです。私も一緒にその冥土の旅に出てやらないとどうしても成仏ができないようです。おかめは毎晩帰つて来て、私のわきにねます。葬式の日から毎晩、来ない晩はありません。それで時々本当に死んだのではあるまいと思う事があります、様子や行いは生きていた時と全く同じですから、——ただ私

に話をする時、小さい声で物を云うだけです。それから、いつでも、自分の来る事を誰にも云わないようにと申します。私にも死んでもらいたいのでしよう。私も自分だけなら生きていたくはありません。しかし、全く仰せの通り私のからだは両親のもので、両親に先ず第一に孝行しなければなりません。それで、本当の事を皆申し上げるのです。……はい、毎晩丁度眠りかけると参ります、それから明方までいます。鐘が聞えると出て行きます』

八右衛門の母がこれを聞いてびっくりした。直ちに檀那寺へ急いで寺僧に息子の告白の一切を話して助力を乞うた。高齢で、経験の積んだ寺僧はその話を聞いて驚く色もなく、彼女に云つた。

『こう云うことは時々あるものです、始めてではありません、それで御子息も助けて上げられると思います。しかし今大層危い処です。愚僧の見る処では、お顔に死相が現れています、おかめさんがもう一度帰つて来れば、もうそれきりです。それで即刻やるべき事をやらねばなりません。御子息に黙つていて下さい、大急ぎで双方の親戚を集めて、寺へ来るようになつて下さい。御子息のためにおかめさんの墓を開けねばなりません。』

そこで、親戚はお寺に集つた、墓を開く事と一緒に承諾したので、僧は一同を墓地へ案内した。そこで、その指図に随つておかめの墓石はわきへやられ、墓は開かれ、棺は上げられた。棺の蓋が取られた時、居合わした人は胆を寒くした。それはおかめは病気の

前と同じく綺麗に、顔に微笑を浮べて一同の前に坐つて、——彼女には何等死のあとはなかつたから。しかし、僧は棺の中から、死人を取り出す事を人々に命じた時、驚きは恐怖となつた、それは長い間正坐の形を取つていたにも拘らず、その死体は触わると生きているように暖かく、しなやかであつたから。

それを葬場へ運んで、僧は筆を取つて額と胸と手足に何か聖い功德のある梵字を書いた。それからその屍をもとの場所へ葬る前に、おかめのために施餓鬼を行つた。

彼女は再び夫の処へ来なかつた、八右衛門は次第に健康と力を回復した。しかし彼はいつまでもその約束を守つたかどうか、そ

れは日本の作者は書いていない。

原註一　日本では死体は普通殆んど正方形の棺の中に正座の形に置かれる。

青空文庫情報

底本：「小泉八雲全集第八卷 家庭版」第一書房

1937（昭和12）年1月15日発行

※原題の「〔THE STORY OF O-KAME〕」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「THE STORY OF O-KAME」としました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「或→ある (て) 居→い 又→また 未だ→まだ (て) 見→

み（で）貰→もら」

※以下の語に底本にはないルビを追加しました。

「一寸 《ちよつと》 何等 《なんら》 先 《ま》 ず」

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：館野浩美

校正：大久保ゆう

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつた

のは、ボランティアの皆さんです。

おかめのはなし

THE STORY OF O-KAME

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小泉八雲

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>